

## 50 江戸時代における輸入漢薬の流通に

ついで——江戸送り漢薬八品を中心に——

羽 生 和 子

関西大学大学院文学研究科博士後期課程

江戸時代において長崎に輸入された漢薬は、長崎から大坂へ運ばれ、大坂の薬種問屋を通じて全国に販売されていた。特に大消費地の江戸では、江戸幕府が開かれて以来、江戸本町三丁目に限り、薬種問屋株が公認されていた。このように長崎から大坂を経由して江戸へ送られた薬種を取り扱う問屋が江戸本町三丁目を中心に存在し、ここから関東、奥州の地方薬種問屋に供給された。

大坂の道修町薬種中買仲間から江戸へ出荷される場合の運送の実態は、へくすりの道修町資料館〈所蔵の『江戸売買』に関する古文書で知ることができる。

江戸へ出荷された薬種は、旧暦の毎月二十五日まで大坂奉行所へ報告するように定められていた。この

ため流通に関する記録が残ることになる。各荷物の出荷人と荷受人の末尾には、陸送と海運による輸送形態を区別していた。江戸初期における輸送方法は、すべて陸路であったが、その後江戸が大消費市場になると大坂・江戸間の海上航路が整備され、檣垣廻船、樽廻船の発達とともに、消費物資の回漕を業務とする「江戸積み廻船問屋」が現れ、大坂・江戸の海運が発達し、薬種の大坂から江戸への船積みもこれを利用していった。

本発表で使用した文書では、宝暦六年、八年の場合大坂から江戸への搬出は、陸送が一〇四件、船積みが一〇八件であり、宝暦八年、九年の場合は、陸送が一六七件、船積みが一一三件であったことがわかる。薬種の小口荷物で頻度が多く出荷する場合には陸送を使い、口数や量の多い荷物をまとめて送る場合には、船積みで大坂から江戸へ搬出されていたことがわかる。

本発表では、長崎において輸入された漢薬の国内の流通の経路について、特に大坂から江戸へ搬出された実態を明らかにするものである。

長崎の五ヶ所本商人より落札されて、大坂の薬種問

屋へ送られた葉種を道修町葉種中買仲間は品質を吟味し、斤目掛け改め（目方改め）、入札により値決め（値組）して買い取る仕組みになっていた。この仕入れた葉種は蔵に納め、注文に応じて荷直しをして江戸へ送られた。荷出しは大坂の葉種中買仲間であり、荷受けは江戸本町・大伝馬町の葉種問屋である。現存する文書により葉種名、数量、月日、荷直し方法、荷出人、荷受人、輸送方法が明確に判明する。

ちなみに寛政七（一七九五）年に「八品売り渡し有無御尋ねにつき断り口上」なる古文書が二十三通も現存している。当時の漢薬の中では、次の八品が重要な位置を占めていたと考えられる。

- 白朮（キク科ホソバオケラの根茎：健胃、鎮痛、利尿薬として関節部や体内の水分を取り除く）
- 木香（キク科の根：芳香性健胃、整腸作用あり、気鬱による不快な気分や痛みを除く）
- 肉桂（クスノキ科の常緑高木：芳香性健胃、香料）
- 厚朴（モクレン科ホオノキの樹皮：健胃、整腸作用あり気の流れを促し胸満、腹満、筋肉の緊

張などに用いる）

縮砂（シヨウガ科の種子の塊：芳香健胃薬として

消化機能を高める）

酸棗仁（クロウメモドキ科サネブトナツメの種子：

鎮静、催眠作用があり、虚弱やストレスによる不眠に用いる）

麻黄（マオウ科の地上茎：鎮咳、発汗、駆水作用

あり、悪寒発熱による身体の疼痛や関節痛、感冒、喘息、皮膚疾患に用いる）

檳榔子（ヤシ科ビンロウの種子：収斂、健胃、駆虫作用あり、気の滞りによる痛みや不快感を除く）

江戸時代の人々は実体の判らない疫病に対処するのに専ら、これらの漢方薬を愛用したと思はれる。特に国産化出来ない輸入漢薬は根強い人気があったのだろう。

何しろ現代のようにウイルスや、細菌の知識が無く、治療は対症療法と全身の不快感を除いて自然治癒力に期待するしかなかった。